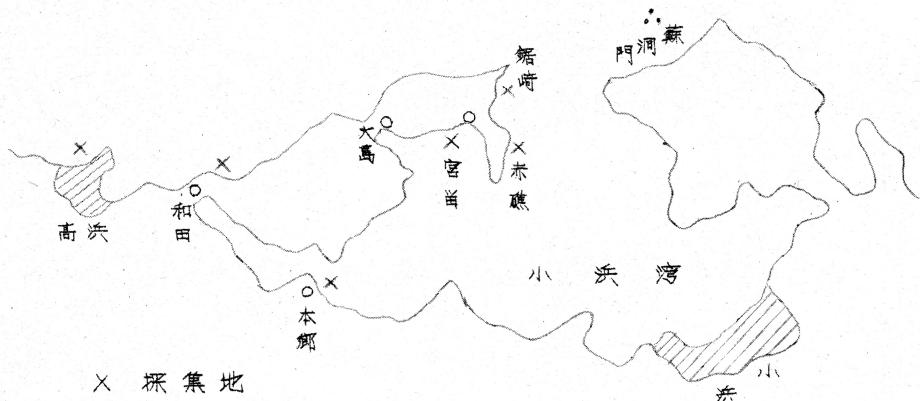


大島半島海産動物採集記



まだ亮ぬ土地は夢の土地。まこと、若狭の海は夢の海である。過去四年にわたつて、敦賀湾を採ること三度、昨年は備神の突端に船を進め、今又小浜湾を深くいだく左舷の大島にリックとノンキと廻乱の数々の七つ道具を体の廻り一ぱいにぶらさげた田尻伊藤、小林の見なれぬ風貌の三人が村の子供たちにじろじろ見ましられながら大島半島の海にはいつていつたのは八月の十一日であつた。

海産動物班の三名は、若狭本郷で大島行きの定期船に乗るや否や海に注ぐ眼がするとい。桟橋では子供が糸をたれて、つり上げたヒイラギを貰い受けたり、波打際の海藻の着生状態から、ここに生息する動物の豊富さを想像して、胸をときめかす。

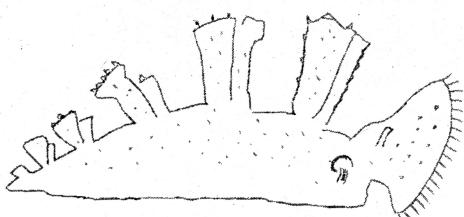
おだやかな内湾を30分程も船に乗つて、たつた15円の船賃を払つて、半島の突端部落宮前着船したのが11時半、渚一帯が泥海の平凡さにやゝ期待外れを感じる。あちらこちらの舟小屋につながれた漁師舟の中の狭い吃水の深い南洋の丸木舟のような数々の舟に、何か遠い異郷に来たような錯覚をおこす。

泊る宿舎とてないこんな土地では、学校が唯一の宿舎である。快く迎えられて、町の学校には見ることもできない立派な青畳の裁縫室に落着く。校庭の今を盛りと吹き乱れる真紅のサルスベリの大樹が頬り映えて、この大広間が浮き立つように明るい。昼食もそこそこに中等の生徒を案内に立ち、採集地を物色する。湾内には直地が見当らないで思い切つて一里程の道を山越えして、外海に出る。

半島の突端鋸崎の灯台に立つて、遠くかすんだ越前岬を眺め、右手に蘇洞門の絶景を間近に眺望し、左手に半島の外海に面した絶壁の白波にくだける景勝をたゞえる。飽かぬ眺めながら惜しまるくはこの怒涛の磯こそ未開拓の採集地、絶好の海とは思われながらこの断崖には水際に降り立つ足場もなく、たゞえ磯に降り立つたとしても今日のこの大波には

何の島すところもないであろう。脾内の歎をもらしつつ波静かな内海に入る。

小浜湾口のこの島陰は、日本海の漂流物が皆こゝに集つたのではないかと思われる程に夥しい。難破船の残骸すら岸に打ちあげて人影一つ見えないこの海は絶海の孤島のような淋しさを感じる。海藻が茂り、海底がよどんで思いの外に生棲動物が少ないのでがっかりする。だが海を荒す海女も訪れないためか、小石の下にもバフンウニが目立つて多い。不成功をかこつてウニを割ってはこの上ない新鮮なうちにを食う。この頃大部あの磯くさいにおいの生うにがこの上ない珍味となって来た。



ムカシリベ (実物大)

この夏の採集会で雄島の海で採れたムカシリベがむやみが多い。雄島で採集したこの種はソ羅にも満たないといふ貧弱な二匹であったが、この海では久々8匹もあるやつが、生殖時期であろうが3,4匹もつれあつて石陰にひそんでいる。このクロテスク其体形とその運動する姿は凡そこの世のものとも思われないような奇怪さ。こんな天才夢想家がこの怪奇な姿は想像できないであろう。手にするのも気味悪いこのムカシリベを探るも探つたり、広口びんに一ぱい採集してしまつた。この奇妙な真気が指先に滲み込んで吐き氣を催す。大事に持帰つたメリベはびんの中でもつれ合つたためか背中の突起を落してしまつて宿舎に着いた頃はいとも平凡な姿にかわつてしまつた。

この日の採集物は、バフンウニ、ムラサキウニ、アカウニ、イトマキヒトデ、ヌノメイトマキ、クマノアシツキ、ウスヒラムシ、フサコカイ、イシガニ、フナタイムシ、インカイメン等に過ぎなかつた。

ま夏とは言いながら、日陰の海は寒い。やつとここまで来てこんな貧弱な採集ではと、引揚けを惜しみ、無限の漂流物をたいて暖をとつて採集を続ける。6時半やつと見切りをつけて海水パンツのまゝ峠越えの帰途につく。

宿舎の部屋に着いた時はもうまづくら、何とか今日の不成功を挽回したいと漁師の家をたずねて今晚出漁するたい綱元さの底身さにひつかつたもろもろの持ち歸りを依頼する。又戻りひき受けで呉れて嬉しい。宿舎帰着1時、帰りの星いのを乗じてもうすぐに必搜隊を出す手筈だつたとか。

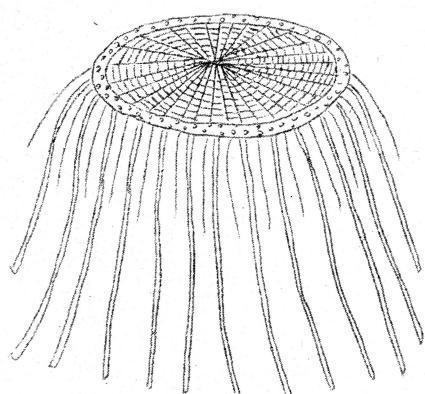
席2日 8月2日 晴

半島の突端に出たが幸に波が穏やかである。朝から太陽が照りつけて、絶好の採集日和。だが朝の海は意外に冷たい。はやる心に冷たさを忘れてのそきの下に寄を求める。ここも海女の東ない海が自然のまゝに海藻が繁茂しているのが嬉しい。小石を取り除く毎にウニがごろごろ出てくる。バフンウニの大きなのが今までどこの海でも見れなかつたつぶそろいがころがり出る。越前の磯と云つてかわつたウニの天国である。不思議とアカウニが多

い。サンショウウニやシラヒドウニは深みにおるのか殻では嘗て採集されたことがない。衣賀湾水島の磯で死んだスカシパンは拾つたがこれも又姿を見せない。

石をめくる度に又、3寸のイシダイのむれがひとつと集つてくる。石の下にひそんでいたもろもろの餌をあさるためであろうか、試みにゴカイを一匹手に持つてのそいでいると数匹が飛びついて来る。ゴカイのえさとしての真価がうかゞえて興味深い。あちらこちらの岩礁に10種四方程のキクメイシが見あたる。切出しをキクメイシと岩の間にぐつと突き込んでぐいとこじ上げるとほろりと剥げ落ちる。海水の中のキクメイシの表面は恰も小さなイソギンチャクが群棲するかのように觸手を一ぱいに広げている。その一部にちよつとした衝撃を与えると、何百もの觸手が一度に影をひそめ、黒い菊の花の匂い旗様に束つてしまふ。かくて吾々はのぞきの下に珍奇な動物の生態を飽かず観察しながら採集を続ける。

今日の採集で一番の珍品はギンカクラケであった。波のまにまに漂う銀色に輝く直径3種許りの円盤、何かおもちゃや漂流物ではなかろうかと水をすかして見ると、その下面に紺色の数種の長さのリリマンのようないもが一面に下がつている。然かもそのひもが頑りと上下運動をしている。そのとたんこればクラケの一種だと直観した、あのリリマンのような觸手に刺されても大丈夫、のぞきで海水もろ共にすくいとる。本口びんに移してこの不思議な形態と運動に見入ることしばし。帰宿してしらべてみたら、腔腸動物、ひと虫綱膚水母目ざんかくらげ科と判明 然かもカツオノエホシ同様に群体であることも勉強した。



(ギンカクラケ 略図) (実物大)
キウニ, アカウニ,

亮の首でも取った漬りで持ち帰つたギンカクラケも次々と觸手をふり切つて、とうとう円盤だけの標品になつてしまつた。後で酒井恒博士に教わつた事だが、急にフオルマリン液に浸ければこんな結果にならない由。

今日の採集品の主なものは、

キクメイシ、ギンカクラケ、後鰓類四種、コカイ類二種、ヒモムシ類二種、ヒザラガイ三種、カラスホマ、アカイタホマ、イソカニ、クロベンケイ、ヨツバモガニ、イツカクガニ、イシガニ、ヒラツメガニ、イソカイメン三種、バフンウニ、ムラサ

昨夜頑んでおいた漁師の藤井岩三郎様は一斗桶一ぱいに小浜湾の底曳きの獲物を氷結ので持ち帰つて下さつた。個体数は多かつたが種類は少なく特別なものは見当らなかつた。イシガニ、ナナトケコブシガニ、フタボシイシガニ、ヒメガザミ、イシエビ、スジオシマコ、テナガタコ、サンショウウニ、スナヒトテ、トゲモミジカイ、ヤマトマドカリ、オニヤドカリ、タイラギ、ウミエラ、イソギンチャク二種。

第3日 8月13日 晴

未明に起床、第一回の便船で本郷に引揚げ汽車で和田の海岸に出る。沿にアカカイの貝殻がうす高く捨てられている。つい2、3年前まで小浜湾に無数に棲息することも知らず、又利用することも考えられなかつたが、ここ2、3年に湾内に銳進することも、更に謹詠にすることの研究も行なわれて、今では数百万円の収益をあけているとか。こんな狭い湾内でも知らないまゝに放置される資源があつたのかとそのうかつさを不思議に思う。

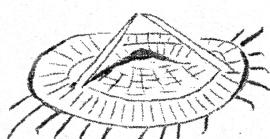
和田の磯に出て採集を始めたが、外海に面して波が荒く、加えて日陰の磯で寒さに堪えかねて早々と切りあけ、水泳パンツ一つでリック、のそき等の一切の荷物を背負って、高浜までの漁を徒歩で駆進することに決心して一重以上もある長漁をたくつく。途中轟かば入江に数日前伊藤君が鷹巣で採集して珍奇を誇っていた後鶴鱗の一種 ハナテンシヤが波に漂っている数個を見つけ出してこむしり。ウミウシ類は皆海底に生存するものと許り思っていたのに、子供の掌大のその体表には深紅色と緑色の斑点を黄色の地にちりばめ、ハナテンシヤとは名付けて妙と感歎しばし、何かの本で読んだことだが陛下の側近の学者のつけた名前だとか、すばらしい名付の名人もあつたものだ。

悪い掛けば珍種の採集に気をよくして長漁を歩るのは、昨日たつた一つを採集した。キンカクラケが和田と高浜の海岸に三個、加えてカツオノカンムリまで数個採集することができた。昨日の失敗は繰返すまいといとも鄭重に持ち運んだが、キンカクラケは相変わらず鮮青の觸手を切つて不整な円板だけとなってしまった。カツオノカンムリだけは原形を崩さないで標品となし得たのは、せめてもの慰めであつた。

高浜の防波堤裏の波の静かな入江で採集を始める。午後又時半の汽車に向に合せるとすれば3時間そこそこ、ろくろく滞着して昼食もしないで海水にもぐる。この入江はどうしたとか岩礁やホンダワラ類にビドロゾアが擴る多い。一本の海藻にも無数のビトロゾアが付着している。恐らくここだけで數種はいるのだろうか。シロガマとクロガマしから知る由もなく、どれもこれも菅びんにおしこんで持ち帰る。帰る間際にかって見たことのないウミウシの一群が岩底にひそんでいるのを見い出し一網打尽に板の中へ納めてしまう。目の覚めるような美麗なこのウミウシもホルマリンの液中では見る見る色を失ってしまうのは惜しまれてならない。

体に真水一滴流さずにちやにちやの海水パンツのまゝ駅に駐けつけたときは電車数分前であつた。

標本瓶と百本近い實瓶に數十種の採集ができて今年の採集会も先々の成績であつた。車内でフォルマリンを滴下して腐敗を防ぎ、危険の処置が終る一行は暑さにむれる車中に何の苦もなく3日間の疲労にぐつすり寝込んでしまった。



カツオノカンムリ
(実物大)

(小林貞七記)